

夢は生きていますか

辻 憲男 (文学部教授)

子どものころの夢やあこがれは今も生きていますか？

明石で育った稲垣足穂（いながきたるほ）は、少年の心を持ちつづけた天才小説家であった。明治末年、12歳の時に須磨の浜で見た、アメリカの飛行家の水上ショーに魅せられた。中学は神戸の原田にあった関西学院にかよった。元町の洋菓子店の壁の天文学者のふしぎな絵が忘れられなかった。車やプロペラ機や天体に夢中になった。東京に出て運転免許を取った。複葉飛行機をつくったが、近眼のため飛行士にはなれなかった。短い話をたくさん集めた小説を書いた…夜空の星を三つ取った、うしろからお月様が来て「おまえはいま何をした？」と言い、暗がりですんごなぐって去ろうとしたので、レンガを投げつけてやった、ポケットの中の星はこなごなにくんでいた、翌日その粉をタネにしてパンを三つこしらえた、といった話である（『一千一秒物語』）。

タルホは「神戸は美少女の都である」と言った。アメリカンピンクの帽子やセルリアンブルーの洋服の少女、しかも黒い涼しい瞳の持ち主がいい、と。

そう言えば、宮崎駿のアニメにも空飛ぶ話が多い。そう言えば、あの『星の王子さま』の作家サン＝テグジュペリも勇敢な飛行士だった。おもしろいことにタルホと同じ1900年の生まれである。…かくいう筆者も電車の運転士になりたかったのだった。今もって鉄道ファンゆえ、ヒコーキ少年たちと違って、なるべくなら飛行機には乗りたくない。



原田の森＝王子動物園の西にある、もと関西学院のチャペル。
1904年の建築。昨年末に神戸文学館として生まれかわった。